大宰府における釈奠

釈奠とは、孔子をはじめとする先師・先哲に対する儒教のお祭りをいいます。もちろん中国から移入され、日本で始められたのですが、この釈奠は日本的変容を受けていない、中国的要素を色濃く残した儀式であるとされています。

『続日本紀』大宝元（701）年2月丁巳条に「釈奠す。（釈奠の礼、ここにおいて始めて見えたり。）」（原漢文、（）内は割注）とみえるのが、その初見記事です。

この釈奠には、中央の大学で執り行われるものと、地方の国学で執り行われるものがありました。大学における釈奠の整備に尽力したのが吉備真備でした。真備は、遣唐使に留学生として随行し、帰国の際に唐礼130巻を将来したことが知られており、これによって釈奠の儀式も整えられたのではないかと考えられています。『続日本紀』宝亀6（775）年10月の真備の薨伝（没した時に記された真備の伝記）に「これより先、大学の釈奠、その儀いまだ備わらず。大臣（真備のこと）、礼典に依り稽て、器物始めて修る。礼容観るべし。」とあるのがそれを示しています。

また、地方の国学で行われる釈奠については、「天平八年薩摩国正税帳」に春秋の釈奠についての記載があります。そこには「春秋釈奠料」として92束の稲が計上されており、先聖（孔子）・先師（顔回、孔子の弟子のひとり）の2座を祭っていること、その神座にはご飯と酒が供えられたことなどが分かります。

ところで、この釈奠は大宰府においても執り行われていたことが知られています。しかし、それは諸国とは少し違っていました。先にみたように薩摩国の事例では、先聖・先師の2座を祭っていましたが、『類聚三代格』貞観18（876）年6月10日太政官符によると、大宰府では、これに孔子の弟子のひとりである閔子騫を加えて3座を祭ることとなっていたのです。

この官符によれば、大宰府においてこの3座を祭ることは「行い来ること既に久し」、つまり長い間そのように行って来た、とありますが、いつからそうなったかは不明です。しかし、先にふれた吉備真備が筑前守や大宰大弐に任命された経歴をもつことを考えると、やはり真備による釈奠の儀式整備の一環とみることができるかもしれません。

市史資料室　重松敏彦